


# 経済学について



梶原 博



誰でも初恋の時には、相手の気持ちが分からなくてずいぶん悩むものです。ご多聞にもれず、私もそうでした。中学生の頃は、生意気なものと相場が決まっていますが、とりわけ私は（いま以上に）嫌な人間で、「経験と知識こそ不足するかもしれないが、自分のこの意思と能力をもってすればできないことはない」などと信じていたのです。そんな自信が「恋愛」というありふれたエピソードに直面して、あっけなく崩れ去ったわけです。恋愛というもおこがましいような失恋でしたが、その時つくづく感じたのは、辛さもさることながら、「他人」というものの存在の不可思議でした。それまでも他人と接していたのではないかと、そう皆さんは思うでしょう。親子は他人というにはあまり近すぎるから除外するとしても、例えば友達がいるだろう、と。しかしこのころの友達といたら、おしゃべりやスポーツ、勉強やクラス運営など、必要に応じた付き合い方を選んで、必要に応じて友達であることをやめられる。自分との関係はいつでも自分から断ち切れるのであって、要するに自分中心にしか他人が関わって

こないわけです。ところが、どんなに考えても分からない他人の思い（まあ、彼女は自分のことをどう考えているのだろう、というやつですね。はたから見たら実に良く分かるわけですが）というものがあって、それを知ろうとせずにはいられない。いらいらして、あげくの果てには「いっそなくなってしまえ」などとも思うのだけれど、顔を見ずにはいられない。こいつは一体なんなんだ、と考えたわけです。そして、おぼろげながらにたどり着いた結論が、「ああ、彼女は（そして自分以外のすべての人間は）他人なんだ」ということだったわけです。

世の中の悲劇の多くは、人は分かり合えるものだと思いつくところからはじまります。あなた方が友達関係で悩む時、「自分のここがいけない」とか、「あの人のあそこが問題だ」などと考えるかもしれません。しかし、それらを直してみたところで、あなたと友達が他人同士であるという当たり前だけれども動かしようのない事実がある以上、必ず同じような事が持ちあがることでしょう。家族なるものの関係のややこしさについては一冊の本が書けるでしょう。とにかく、まじめに相手と向かいあえばあうほど、「自分」と「他人」という「関係」が重くのしかかってくるのです。

一方、世の中の感動は、こうした他人同士がある特定の状況で想いを共有することから生まれます。一般に芸術といわれるもののもつ異様な力はすべて、こうした共感から生まれます。完全に重なり合うことのできない人間同士だからこそ、ほんの一部でもいいから、想いを分かち合うような努力や才能が尊ばれるのです（そしてそうした感動を味わう一番安易な場が「家族」だというわけです）。

「経済学」という学問の成り立ちは、人がこうした「自分」と「他人」との「関係」をより突き詰めて探るようになったことと、実は大きく関わっています。どんな立派で、「正しい」人でも、他人の気持ち一つ一つを好きなように動かすことは決してできません。じゃあ「人にはそれぞれの価値観があるのさ」とニヒルに笑ってられるか。恋に破れて死ぬ人も減多にいませんし、たいてい時が全てを解決してくれます。また、みんながみんな恋愛に忙しいわけではありません。しかし、毎日の生活は違います。ここでいう「生活」とは、会社勤めのような経済的なことに限りません。親子の関係や先生と学生の関係などのすべてを含むものとして「生活」があります。これらの関係は、そう簡単にやめるわけにはいきません。あなたのお父さんがある日突然、「家族と言っても所詮他人だ」と思い立ち、給料を全部自分のために使ったとしたらどうなるのでしょうか。お百姓さんが作った米を、「これからは自由化の時代だから」といってこれまでの半額のお金しか払わないとしたら、等々。あなたや、その他多くの人の暮らしは、網の目のように張り巡らされた「世の中、こういうものだ」という人の想いに拠りかかっています。そしてさらに、「日本は金を出すのが当たり前だ」というような想いは、湾岸戦争という世界的な事件をも可能にしますし、この網の目のほころびは、それこそ人の生き死に直接関わってきます。そのような関係を取り結んでいる一人一人が実は赤の他人同士でしかないことに気付き、しかしこのような他人同士が様々な価値観を持ちつつも、それでも結びつき協力し合っていることの素晴らしさに感動するところから、経済学という学問は始まりました。それは「わずか」2、300年前のことにすぎません。

株の売買から簿記に至るまで、それらの経済活動の背後には長い年月をかけて培われてきた、「他人」への想いが横たわっています。経済学はそんな様々な想いを勉強する場なのです。

(初出：「豊かな学生生活のために」〈別府大学短期大学部・商経科、1992年4月〉を再掲)

〈センター活動にて〉



竹田にて (2013)



天瀬温泉にて (2014)



天瀬公民館にて (2014)